

映画「男はつらいよ」にみる

地域の風景

映画「男はつらいよ」のシリーズ全48作の主なロケ地は、枕崎市や霧島市、瀬戸内町など全国で約120市町村にのぼるといいます。

山田洋次監督はロケ地選びについて、「単に町並みの美しさだけではない」と前置きし、「子どもからお年寄りまで住む人々の声が聞こえ、寅さんがそこにおいても不思議でない町」と話しています。

昔の日本は外国から「子どもの楽園」と呼ばれ、きらきらした目の子どもが朝から晩まで町で遊んでいました。今はその姿がありません。地域社会が子育てに果たす役割も少なくなりつつあります。

私が小さいころ、農繁期には学校が休みになり、大人に交じって田植えや芋掘りを手伝ったものです。社会の一員として自覚し、自然や隣人に関心を持ち、人と人がつながって社会をつくり、自分を育ててくれていることを感じたものです。つまり、地域は社会の場でした。私はこれを「社



魚見校区民による芋掘り
(11月13日)

会力」という言葉で表したいと思えます。

社会力は、目の前の社会に適応する術すべではなく、私たちの社会が生き残っていくための力です。そういう意味では、今まさしく地域人として大人の生き方が問われています。

地域で子どもを育てるためには、自分の子どもをどうするかより、地域人として大人がどう動くかが大事です。地域や家庭で何ができるか。できることを、できる部分から、できる形で始めないと、寅さんのロケ地にはなりません。しょう。

山田洋次監督の言葉に、地域社会の役割を考えたものです。

指宿市長 豊留悦男